

徳川家康の江戸入府とまちづくり

① 幕府成立後に大規模な土木工事

ハイセンスで華やかな銀座をはじめ、活気あふれる繁華街が立ち並ぶ中央区のまち。しかし、天正18年(1590)に徳川家康が江戸に入府した当時は、葦(アシ)や薄(スキ)の生い茂る潮の浜が続く場所だった。

江戸入府から13年後の慶長8年(1603)、家康は江戸に幕府を開くとともに、大規模なまちづくりに着手した。まず神田山などを掘り崩した土で現在の皇居と東京駅の間にあった日比谷入江が埋め立てられ、浜町付近から新橋に至る隅田川沿いの一帯がつくられていった。日本橋や京橋などの町人地は、この時期に完成したといわれる。

元和2年(1616)には、現在の神田川にあたる掘割が開削された。これにより、人々は洪水の心配から解放され、安心してまちの発展に寄与していく

土地の造成と並行して上水路の整備や幹線道路づくりも行われた。日本橋は、平川が東へ延ばされて日本橋川となったところに架けられた橋で、まちづくりが始まった慶長8年頃に完成したとされる。日本橋の橋名の由来には諸説あるが、幕府が編纂した地誌『御府内備考』には、「この橋、江戸の中央にして、諸国の行程もここより定められるゆえ、日本橋の名ありといふ」と記されている。橋が完成した翌年には、一里塚が設置され、日本橋は五街道の起点となった。



また、名実ともに江戸の中心地となった日本橋には、幕府が決めた法度(はっと)や定書(さだめがき)などを板札に書き、一目をひくように高く掲げる高札場が置かれた。

京橋が架けられたのも日本橋完成とほぼ同じ時期で、この道筋は京都につながる東海道の出発点となった。京橋の欄干には、日本橋や新橋と同様に擬宝珠(ぎぼし)が飾られ、その後長く江戸の玄関口としての役割を果たすことになる。

② まちづくりの整備に伴い市場や商店街が発展

江戸城を中心とするまちの基盤は、寛永12年（1635）頃にほぼ完成した。

まちの土台が整いはじめると、人々の食生活を支える市場が立ちはじめ、日本橋の魚市場や京橋の青物市場が相次いで開かれた。また、商店街も本町、大伝馬町、横山町、馬喰町から南の日本橋、京橋、銀座、新橋へと広がり、関西出身の商人たちが次々に店を開いた。こうした活況を後押ししたのが参勤交代である。寛永12年（1635）の武家諸法度（ぶけしよはつと）で定められた参勤交代によって、江戸藩邸では多くの藩士が生活するようになった。このため、必要とする諸物資は膨大な量となり、この需要を満たすために商人・職人の集住が進んだのである。

寛永元年、中橋南地（なかばしなんちー現在の京橋一丁目周辺）に猿若座（のちの中村座）が建てられ、この地は江戸歌舞伎発祥の地となった。寛永9年頃には、中橋の芝居小屋は禰宜町（ねぎちょうー現在の日本橋堀留町付近）に移転し、その後この一帯は芝居町として隆盛することになる。

木造家屋が密集する江戸のまちは、「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるほど火事が多く、人々を悩ませていた。明暦3年（1657）1月18日に発生した火事は激しく燃え広がり、一旦鎮火したものの再び出火し、翌19日には江戸城の天守・本丸・二の丸・三の丸を焼失した。のちに「明暦の大火（振袖火事）」と呼ばれるこの火事は、2日間で現在の中央区の大半を焼き尽くし、10万人以上の死傷者を出したと伝えられる。



明暦の大火

この大火をきっかけに江戸市中の大改造が行われた。まず、延焼を防御する火除地（ひよけち）を江戸城内に設けるため、城内にあった武家屋敷は御三家をはじめとしてすべて郭外へ移転させられた。結果、現在の中央区では、武家屋敷の数が増え、その一方で日本橋や京橋付近は町屋として栄えていく。また、人形町から富沢町にかけて広がっていた吉原遊郭は、大火を機に浅草へ移転した。

築地が誕生したのも、明暦の大火の時である。

当時、浅草橋近くの横山町二丁目南側（現在の都営地下鉄浅草線東日本橋駅の一带）にあった江戸浅草御堂（現在の築地本願寺）は大火によって焼失したが、区画整理のために旧地への再建ができなかった。その替え地として下付されたのは八丁堀先の海上百間（約180m）四方であった。

このため、万治元年（1658）に佃島の門徒が中心となって海を埋め立てた土地に仮本堂を建立し本尊を遷座した。その後、延宝7年（1679）にはこの地に本堂を再建。新しい本堂は「築地御坊」と呼ばれた。なお、「築地」という地名は、本願寺の移転再建の際に江戸湾を埋め立てて**“築いた土地”**であることに由来している。

大江戸八百八町といわれるまで発展するのはこの大改造以降で、現在の中央区周辺も商業地として著しく発展する。江戸市中はその後もたびたび大火に見舞われるが、そのつどたくましく復興・発展を遂げていく。



文明開化の「ハイカラ銀座」

令和5年7月22日

ガス灯の設置を契機にハイカラ銀座が誕生

明治2年（1869）、新両替町は銀座という町名に変更された。

銀座に転機をもたらしたのは、明治5年の大火だった。東京府知事の「由利公正」は銀座復興計画を提案し、大規模な区画整理を行うとともに、英国人トーマス・J・ウォートルス設計によるジョージアン様式の銀座煉瓦街の建設を推進した。銀座通り沿いの煉瓦街は明治6年に完成し、その4年後に全街区の建設が完了している。

明治7年末には文明開化の象徴ともいえる85基のガス灯が点灯された。「夜を昼に変えた」といわれるガス灯の出現により、洋風の新しい町なみが登場した。物珍しさから、銀座では多くの人が散策するようになり、華やかなまちとして再生を果たした。

銀座の交通手段として忘れてはならないのが馬車だ。鉄道開通以前から、横浜と外国人居留地が開かれていた築地とを結ぶ馬車がすでに走っていたといわれているが、明治5年には新橋～横浜間の鉄道開通にあわせて、新橋～浅草間で乗合馬車の走行を開始。さらに明治15年には、日本橋～新橋間で、鉄製のレールに客車を乗せ、馬が客車を引く鉄道馬車をスタートさせた。後にこのルートは市外電車が走ることになる。ちなみに外国人居留地は、現在の明石町の一带に開かれていた「外国人のまち」で、居留地内には、西洋建築による学校や病院・教会・住居などが建てられ、西洋文化の香り高いハイカラな場所となった。

明治20年頃になると洋風の品物を扱う大商店が開業し、日本橋と並ぶショッピング街へと発展する。新聞社をはじめとするマスコミ機能も集中し、銀座はまさに時代の先端を行くまちへと成長していくのです。

